

古川柳研究会会報

一五一号

平成二十年十月

川柳評万句合明和四年輪講

平成二十年八月九日

礎講 村瀬育男

明四松3続き

33 ○ 虫干を錠前直しのぞきこし

(虫干しを錠前直しのぞき込み)

虫干しⅡ錠前の修理を業とする人。(目)
錠前直しが、虫干しで開け放つてある家を覗いて、錠前修理の御用はないか窺っている様子。虫干しで着物を簞笥から出す際に錠前が壊れているのに気付くなど、錠前直しの商売のチャンスがあるのだ。
薄雲が座敷錠前直し見る 桜16

どの意見が出された。

36 ▲ 御丈ハ十八町へ壺分つ

(御丈は十八町へ壺分つ)

礎講は木曾御嶽山の句とし、頂上までの距離が七里(二五二町)あり、これに三両二分の料金を払って登山するので、十八町に一分の計算になるとの意とした。
席上では、「御丈」は浅草寺ご本尊の身の丈のことで、御丈一寸八分は、浅草寺までの道程十八町へ一分ずつの割合ということになるという意とされた。

江戸のどこから十八町なのかはつきりしないが、席上では浅草見附からとの意見があり、また、

十八町行と寺号につきあたり 安七松4

は浅草寺の句だろうとの意見も出され、やはり一般に「十八町」と認識されていただろうということに。

37 ひとり手につるべの下る物すこさ 五10

(ひとりで釣瓶の下りる物凄さ)

井戸の釣瓶がひとりで下りていくのは、幽霊・物の怪の仕業のようで気味の悪い感じがする。

礎講は「皿屋敷」の句としたが、席上では、一般句で通じるので限定する必要は無からうということに。

34 × 人足も馬も受け込む若いもの 拾八18

(人足も馬も受け込む若い者)

礎講は、吉原の若い者(妓楼の従業員)が人足の仕事も付け馬役も受け込む(引き受ける)意とした。
席上では、主題句が「拾八18」(鄙ぶり)に取られており、この丁の句は全て品川の句であることを重視して、主題句も品川(または宿場)の句ではないかとの意見が出されたが、結局、両説有りということに。

35 やくそくし・小判のうらへ書て遣り

(約束し・小判の裏へ書いてやり)

ある約束をして、そのために小判の裏へ何か書いて遣るという意味かと思われるが、はつきりしない。

席上では、吉原の遊客が紋日の仕舞いの約束をし、事前に揚げ代の小判にちよつと何か書いて届けた様子、な

38 × おとり子をこわかる大屋りちきもの

(踊子を怖がる大屋律儀者)

踊子を怖がって長屋を貸さない大屋は律儀者だということである。堅物の大屋で、踊子という職業を胡散臭く思つて敬遠するということであろう。

明店のたへぬがかたい大屋なり 一〇12

39 × 文つかひ袖口を買ふひつらこさ 五10

(文使い袖口を買うひつらこさ)

文使いⅡ吉原語。女郎の手紙を客に届けるのを職業とする人。(目)

ひつらこいⅡくだい。しつっこい。(江)

文使いが、呉服屋の手代に遊女の文を渡すため、安い袖口を買って客を装いチャンスを狙っている様子。客の秘密を守るためのしつっこいまでの職業意識を詠んだものだろう。前句「ほめられにけり」。

文使むす子をはすにまねき出し 四22

40 ▲ まつさきをねたれハ御針口をそへ

(真崎をねだれば御針口を添え)

礎講は、ここで「真崎」は名物の田楽のことで、吉原の遊女が客に田楽を奢ってくれるようおねだりしたとこ

ろ、傍で御針が「私たちもお相伴したい」と言っている光景とした。

席上では、遊女が客に対し、真崎稻荷へ遊びに連れて行ってくれるようにねだったところ、傍にいた御針が「それはいい、是非連れて行ってもらいなさい」などと口添えをしてくれる様子ということに。

真崎ハにぎやかゝへとよりかゝり 拾八10

41 ▲ 田楽のとうから止^レおもしろさ 五10

(田楽の途中から止む面白さ)

続いて真崎稻荷の句。真崎稻荷で吉原行きの話がまとなり、名物の田楽を食べるのも途中で止めて、勇んで吉原へ繰り込む。類句多数の一。

相談か出来て田楽せつく成^リ 明四天1

42 × しちやから出^ルとかこかき見ちがへる 五10

(質屋から出ると駕舁き見違える)

四つ手駕籠に乗って吉原へ行く遊客が、駕籠を待たせて質屋に寄り、駕舁きが見違えるほど立派な身なりになつて出て来たというのである。質入れしていた羽二重の羽織でも請け出して、その場で着替えて来たというようなことだろう。吉原へ行く前に質屋に寄って、軍資金を

44 有^リ合の顔にてしか^ミ火鉢はけ 五10 拾九31

(有り合いの顔にて獅噛み火鉢化け)

有り合い^ニさしあたりその場にある物。(江)
獅噛み火鉢^ニ獅子または鬼のしかめた顔を、装飾として足に鑄付けた金属製(多く真鍮)大形の丸火鉢。(江)
日用品の化け物も色々あるが、獅噛み火鉢はそもそも化け物風の恐れ顔が鑄付けてあるので、特別化けなくてもそのままの有り合わせの顔で化けられる。

三ッ足に人面疗の安獅噛 一三三9

45 ▲ 師匠様いろめくと見て諷にし 五10

(師匠様色めくとみて諷にし)

礎講は、寺子屋のお師匠様が花見などの余興で浄瑠璃などを始めたが、内容が色めいたもので不味いと思ひ、途中から謡いに変更したという意とした。

席上では、寺子屋の師匠が課外授業で謡などを教えることを詠んだ句で、浄瑠璃では色めいて教育上よろしくないのを謡を教えることにしたということに。

うたひをハまけにおしへる師匠^ニ 安四鶴5

46 × 諸太夫ハしのつかたつた壺人なり 拾五24

(諸太夫は篠塚たつた壺人なり)

調達する句は多いが、着物を請け出す句は珍しい。普段着などと質草を入れ替えたか。

さそい人ハしちやの前に待て居^ル 明四宮3

43 ○ 釣^ッの貳朱くすねたやうにはづかしい

(釣りの貳朱くすねたやうに恥づかしい)

くすねる^ニこつそり盗む。ちよろまかす。(江)

礎講は、仲間で遊びに行った時に、代表して勘定を払った人がお釣りの二朱を心付けにやつてしまった。しかし、後になってその二朱をちよろまかしたと、仲間から思われているのではないかと恥づかしい思いをしたとの意とした。

席上では、お釣りに出された二朱の端金を受け取るのは、何かちよろまかしたような気恥づかしい気分だということに。そんな端金は「取つときねえ」と受け取らないのが江戸っ子である。

また、三分女郎を片仕舞(一分二朱)して二分支払い、二朱のお釣りをもらった時の句とする意見があつた(例句についての『教養文庫』の解に同じ)。

ぬすみでもしたやうにするつりの貳朱 七14

諸太夫^ニ①昔、宮中において四位、または、五位であるものの総称。②五位の武士の称。(日)

篠塚^ニ新田義貞の四天王の一人、篠塚伊勢守重広。

礎講は、新田義貞四天王のうち、諸太夫の身分であるのは伊勢守である篠塚重広ただ一人で、あとの三人は左衛門であつて諸太夫ではないと知識をひけらかした句とした。

席上では、本来の伊勢守の地位が従五位下の諸太夫であることと、篠塚重広が伊勢守を名乗っていることを下敷きにして、「篠塚一人が諸太夫というのは何の事?」と謎句に仕立てた句ということに。

篠づかを伊州なんぞと畑はしやれ 明二仁4

47 × 大^イそつな道さとあんまもんで居^ル 五11 拾九31

(大層な道さと按摩揉んでいる)

礎講は、旅人が旅籠で按摩に揉んでもらいながら、明日予定している道中の様子を聞いたところ、按摩が「この先は大変な道ですよ」などと答えている様子とした。

席上では、今日歩いてきた道が「大変な道だった」と話しているというほうが、按摩に揉んでもらっていることが生きるのではないかということに。

たひあんま客のつかれを取て喰^フ 別中27

48 やくそくし・三年寺のめしを喰^イ

(約束し・三年寺の飯を喰い)

東慶寺の句。亭主との縁が切れたら密夫と一緒にになる約束で、三年間東慶寺の飯を喰う。

席上では、「約束し」は縁切りのルールを言ったままで、密夫まで考えなくてもよいのではとの意見あり。

三年が内間男のたいくつさ 傍三3

49 ▲ ちつと斗^カ矢口で咄^ハ太平記 拾五25

(ちつとばか矢口で話す太平記)

礎講は、太平記読みが、矢口の渡しで義興が謀殺される件り(『太平記』卷三十三 新田左兵衛佐義興自害の事)をちよつと話し始めた様子とした。

席上では、矢口にある新田神社へ参詣に来た人が、祭神新田義興の最期の様子を描いた『太平記』について、連れの人ちよつと話をしている光景ということに。

矢口のわたし弓形^リに舟をこぎ 一一一19

50 ○ そうだんハそこをたてろとそばへ寄^リ

(相談はそこを開てろと傍へ寄り)

相談事のあるときは「そこを開てろ」と障子・襖などを閉めさせた上で、傍へ寄ってくる。日常よく見る光景

育王山^ニ宋代の中国五山の一。平重盛が来世の安楽を願って、一千両を寄進(他に帝へ二千両)したとされる(『平家物語』卷第三 重盛大唐育王山寄進)。

尻が行く^ニ関係者に、もめごとの責任がふりかかって行く。とばっちりがおよぶ。(日)

礎講は、重盛が平家一門の繁栄を願って育王山へ多額の寄進をしたのに、平家は亡びてしまう結果になったので、育王山がもう少し近いところであれば、平家ゆかりの人からご利益がなかったことを追及されるところだったという意とした。

席上では、育王山が中国ではなくてももう少し近いところであれば、源平の争いのとばっちりで、重盛関連の寺として源氏の追及の手が伸びるところだったとの意というこに。

育王山おしひ旦那の跡がたへ 籠三16

53 × 宝劔ハおろち下戸なら今に出ず 拾四19

(宝劔ハ大蛇下戸なら今に出ず)

八岐大蛇の句。八塩折りの酒に酔酩した八岐大蛇を退治した素戔鳴尊は、大蛇の尻尾を切り裂いて宝劔天叢雲劔を取り出した。もし大蛇が下戸だったら、大蛇は退治されず、この宝劔も未だこの世に出て来なかったらうと。

を細かく観察した句。

内談と見へて火鉢へ顔をくべ 明五梅2

51 ▲ はし錢で猪牙をねぎるハ卯の日也

(端錢で猪牙を値切るは卯の日なり)

端錢(はしぜに・はしせん) ^ニ端金(はしたがね)。

わずかな金銭。(日)

卯の日 ^ニ龜戸御嶽社の縁日。御嶽社はまた妙義権現とも称えられた。毎月卯の日を縁日とし、正月の卯の日は初卯と称して殊に賑わった。(辞彙)

礎講は、柳橋で吉原行き遊客が「今日は卯の日で、龜戸天神へ行く人が多いから、戻り舟も客がいるだろう。少し負けな」と猪牙のわずかな舟賃を値切っている様子とした。

席上では、卯の日に龜戸天神へ行くために猪牙に乗るような人は、猪牙に乗り慣れた吉原通いの遊客とは違って、僅かな舟賃も値切るという意ということに。参考句は五百羅漢へ。

五ツ目へいくらへけちな柳ばし 二一8

52 ○ いわう山ちかいとしりの行^クところ

(育王山近いと尻の行^クところ)

妙のあるたひ宝劔の名か替り 五三15

54 酔たごぜ人さへ来^ルとからミ付^キ 五11

(酔った贅女人さえ来ると絡みつ)

酔っ払った贅女は、酔いのためにふだんの勘が効なくなつて足元がおぼつかなくなり、近くに人が来ると絡みつく。

席上では、主題句が『最破礼』に採られていることをどう考えるか議論となつたが、破礼の意味はないということに。

ぬいたかとごぜハ手引^キへしがミつき 明三義4

55 ○ あすしまふ迄もりつはなごふく店 五11

(明日仕舞う迄も立派な呉服店)

礎講は、事情があつて明日店仕舞いする呉服屋であるが、最後まで立派に商売をしている。さすがは老舗の呉服屋だけあるという意とした。

席上では、呉服屋というのは、明日倒産するというような事態になつても、外部にはそんな気配を見せず立派に商売をするものだとの意ということに。普通の商売は例句の如くなる。

品切^レのするかぶんさん下^ッ地なり 明六宮1

56 ▲ 田舎もの水戸尻^リ迄つき当^リ 拾七2

(田舎者水戸尻迄突き当たり)

水道尻は吉原仲の町の突き当たり。田舎者は吉原の地理に疎いので、茶屋が並んでいる仲の町を真つ直ぐ行つてしまう。本当に吉原らしいところは妓楼の並ぶ横の道筋である。

真^ッ昼間はいる素見は田舎者 玉8

57 × 湯治からかへつてわるいげいかふへ 拾三2

(湯治から帰って悪い芸が増え)

湯治場のつれづれに悪いことを覚えて帰つて来た。悪い芸とはバクチのことだろう。

湯治から少しハよみもつよくなり 四38

58 ○ ほへるならほへるとぜげんそ引^ッなり

(吠えるなら吠えろと女衞素引くなり)

素引く^ッ強いて引っぱる。連行する。(江)

泣き喚く身売りの娘を、女衞が「泣きたいならいくらでも泣け」と冷たく言いながら引っぱっていく光景。

ふけいきなほへやがるなとぜげんいひ 七35

などと言われ、年齢がわかるということ。

席上では、ふだんは大人びた言動をしている禿も、叱られて泣き喚いているのを見ると、やっぱり幼い年齢だとわかるという意見があった。

叱られる度にむす子の年かしれ 二五4

62 ○ 木の葉どもめんぼく無^イと善界い^ゝ

(木の葉共面目ないと善界^{ぜかい}言い)

謡曲『善界』の句。大唐の天狗の首領善界坊は、日本の仏法を妨げようと渡来するが、比叡山の僧正の祈禱により仏法守護の神仏が出現し、神風によって追い払われる。主題句は、大唐に追い返された善界は、手下の木の葉天狗共に「みじめな結果で面目ない」とあやまつただろうと。

高ひ鼻低くしに來たせかひ坊 二九11

59 御こう過^キきつに釣^リ台出ツ入ツ

(御講過ぎ急に釣り台出つ入りつ)

御講^リ真宗の報恩講。信徒間の見合いの場に利用されることになっている。

釣り台^リ板を台にし、竹を曲げて両端に取り付けた運搬道具。棒を通して前後から昇く。多く嫁入道具を運ぶに用いる。(江)

御講が終った後、あちこちの家で急に釣り台が出たり入ったりしている。御講で縁談がまとまって、結納の品を運んでいるのだろう。「出つ入つ」は軍談物の口調か。廿九日から仲人やたら来る 二三15

60 御局の大きなしりハおもて立^チ

(御局の大きな尻は表立ち)

表立つ^ッ①事が表面に現れて人目にそれとわかるようになる。②正式なことである。③表沙汰になる。(目)

御局の大きな尻は世間によく知られたことであるという意のようである。

61 ▲ しかられて禿の年ハあらわれる

(叱られて禿の年はあらわれる)

禿が叱られる時は、例えば「もう十二歳にもなつて」

